The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『蜻蛉日記』上巻後半部の道綱母と時姫の短連歌 : 平安時代短連歌史と関わらせての考察
Author(s)	堤, 和博
Citation	詞林. 2018, 64, p. 16-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/70608　　詞林　第64号　2018年10月

『蜻蛉日記』上巻後半部の道綱母と時姫の短連歌

――平安時代短連歌史と関わらせての考察――

堤　和博

はじめに

島津忠夫は、平安時代の私家集に載る短連歌について、次のように指摘している。[1]

それらの作品は、やはり時代によって形態の上からも詠まれる場の上からも異なった姿を見せている。従来ともすれば短連歌の性格として一括して論じられて来たが、もう少し短連歌自体の展開に沿って考えられねばならないであろう

この指摘は私家集以外に載る短連歌についても当て嵌まり、本稿を成すにあたって短連歌を載せる多くの作品の注釈書を参照したが、「短連歌自体の展開に沿って」それぞれの「短連歌の性格」を見極めながら注されているものはほとんどなかったように思う。本稿は、『蜻蛉日記』上巻後半部に入ってから五年目、兼家が町の小路の女との関係を断ってから八年近く経った頃の葵祭の折に道綱母と時姫が詠んだ短連歌を取り上げて考察する。

このごろは四月。祭、見に出でたれば、かの所にも出でたりけり。さなめりと見て、向かひに立ちぬ。待つ程のさうぐしければ、橘の実などあるに、葵を掛けて、

あふひとか聞けどもよそにたちばなの

といひやる。やゝ久しうありて、

きみがつらさをけふこそは見れ

とぞある。「憎かるべきものにては年経ぬるを、など『けふ』とのみいひたらむ」といふ人もあり。帰りて、「さありし」など語れば、「『食ひつぶしつべき心ちこそすれ』とやいはざりし」とて、いとをかしと思ひけり。[2]

この場面が如何なる意味合いを持つのか、上巻前半部にあった二度の贈答歌の場面[3]とも質的に変化している面がある筈だと考えるのであるが、とにかく焦点の短連歌について深

く考察する必要がある。なお、この短連歌を、「当該短連歌」と呼んで論を進めていく。

それにしても当該短連歌の表面的な意味は、一見難しくはないようにも思える。しかし、当該短連歌を平安時代の「短連歌自体の展開に沿って」、個別的な「短連歌の性格」も見極めながら考察してみると、短連歌を仕掛けた道綱母のそもそもの意図やそれに対する時姫の反応について深く掘り下げることができ、引いては訳も考え直さなければならないと思うのである。

一、平安時代の短連歌史（1）
―「合作」から「対話乃至問答」へ―

ということで、まずは平安時代の短連歌の史的展開を確認しておく。研究史の蓄積を踏まえて平安時代の短連歌[4]を見通した結果、少なくとも当該短連歌の考察のためには、短連歌が平安時代に次のような展開を辿ったと捉えられるのが重要だと考える。

① 短歌一首を二人で「合作」するものから、前句と付句で「対話乃至問答[5]」するものへと性質が変貌していった。

② 「対話乃至問答」も、前句では機智や謎掛けを仕掛けて付句でそれに応答する形のものが、後になると多くなる。

③ 前句では「言い余し」の形が多かったものが、付句共共「言い切り」の形が求められるようになる。

④ 上句起こし（前句が五七五）から、下句起こし（前句が七七）も現れるようになる。

当該短連歌について確認しておこう。③については、道綱母の前句は「……たちばなの」で終わっており、「言い余し」である。④についても、上句起こしであるのは一目瞭然である。共にこの時期としては普通の古い形を保っていて一見問題なさそうでもある。一方で残った①と②については、見極めが必要で問題があると考える。そうすると、その問題は③と④にも関わってくるのである。

まずは①に関して「合作」か「対話乃至問答」かの見極めをしたい。そのためには、平安時代の短連歌を見渡して、いつの頃迄が「合作」でいつの頃から「対話乃至問答」が多くなるのかを明らかにしたいところである。が、もとよりそのような線引きができるものではなく、「合作」から「対話乃至問答」へと移っていく過渡期が存在する。そして、平安時代の短連歌史研究の大勢に依れば、道綱母の頃がまさに過渡期に当たると目されるのである[6]。

ここで、「合作」と「対話乃至問答」の例を幾つか見ておく。なお、短連歌史研究において特に①（②も含めて）に重点を置く木藤才蔵と宮田正信の論考に大いに依っている[7]。

「合作」の例をAとするが、その古い例としては、『躬恒集[8]』に「聯歌」として列挙されているものがあるので、数首

を挙げておく。

●参考例　Aノ1　『躬恒集』

聯歌

343　もみぢばはこぞもやまべにみてしかど　　近江介

ことしもあかぬものにざりける　　源少将

346　こぞのけふあかずなりにしわれなれば　　修理亮

みねのもみぢのめづらしきかな　　是則

347　いろふかきもみぢたづぬとうちむれて　　左衛門尉

しらぬやまぢにゆきまどふかな　　式部丞

どれも前句が「言い余し」で「合作」であるのは説明を要しないと思う。さらに注意される点として、「合作は本来二人の作者の心が一つの詩想に統一されることによつて成立つ」[9]ことがある。346番で言えば、前句に「われ」が出てくるが、この一人称は修理亮だけを指すのではなく、修理亮と是則が結局言わば一心同体となっているのである。347番などは、二人の「詩想」だけでなく、紅葉狩に「うちむれて」来た全員の「詩想」を詠んでいると見做せる。

Aノ1は、「連歌の場らしいものを、日常生活から一応切り離して想定できる」[10]ところで詠まれたものであろうから、日常における「合作」の例をAノ2として一つ挙げておく。これも、前句は「言い余し」で、前句と付句で一心同体となっていると見做せるであろう。

●参考例　Aノ2　『忠見集』（承空本）42番[11]

朱雀院カクレサセ給ヒテ、アル人

キミマサテアリシニモアラヌユフクレニ

コレカスエツケヨトアル

イカニコエ〳〵ムシノナクラン

一方の「対話乃至問答」の例をBとして、村上天皇と滋野内侍との間に交わされたものを挙げておく。

●参考例　B　『拾遺和歌集』巻十八・雑賀・1183番

よひにひさしうおほとのごもらで、おほせられける　　天暦御製

さ夜ふけて今はねぶたくなりにけり　　しげののないし

御前にさぶらひてそうしける

夢にあふべき人やまつらん

「対話乃至問答」となると（Bは「対話」であろう）、道綱母と同時期であっても、前句は「言い切り」になっている。

ところで、俊頼が規範と考えた短連歌とは「言い切り」で「対話乃至問答」であったとされているが、①と③を併せてそういうところに向かって行くとみれば、「言い余し」で「合作」から「言い切り」で「対話乃至問答」へと向かう流れが大雑把には捉えられる。ちなみに、②と④について言えば、この流れの中で機智・謎掛けや下句起こしも増えてくるのである。

さて、「合作」か「対話乃至問答」かの問題に戻ると、①～④のうちでも特に①（附随して②）に重点を置いて短連歌史を考察する宮田の論[12]に依ると、問題は「合作」か「対話乃至問答」かという択一論には収まらない。「合作」から「対話乃至問答」への過渡期に関する宮田の分析によると、端的に言ってしまえば、「合作」と「対話乃至問答」の中間的な性質の短連歌も見られるのである。また、前句を詠んだ人と付句を付けた人との間で、意識の相違がある場合もあるようなのである。宮田が挙げる過渡期にあって中間的な性質の例をCとし、これに沿って見ていこう。

●参考例　Cノ1　『実方集』186番

あるところにまゐりて、みすのうちにわかき人人もの
いふをききて
すのうちにつつめくひなのこゑすなり
といへど、いらふる人もなければ
かへすほどこそひさしかりけれ

●参考例　Cノ2　『後撰和歌集』巻六・秋中・293番

あきのころほひ、ある所に女どものあまたすの内に侍りけるに、をとこの歌のもとをいひいれて侍りければ、すゑはうちより　よみ人しらず
白露のおくにあまたの声すれば花の色色有りとしらなん

詳しい説明は宮田論に依られたいが、宮田の分析は錯綜しているところもあると思うので、簡略化して私なりに重点を絞って捉え直しておく。Cノ1は、〈簾の中でささやき声が聞こえる〉ということを、巣の中にいる雛の鳴き声に置き換えて実方が言い掛けたわけだが、それはささやき声の主である「わかき人人」から付句があって「対話」をなすことを期待しての所為であろう。B同様「言い切り」であるところからもそれはうかがえる。ところが結局付句も実方が付けて、〈巣の中で雛の小さな声がするものだ。この雛を孵すのには時間がかかったことであるよ〉という一首の短歌が出来上がったのである。宮田は「合作短歌と問答體の連歌との二重の性格をもつものとなつた」と言っている。Cノ2は、詞書に依れば、「をとこ」が短歌の「もと」（本）を詠んで「女

ども」の中から「すゑ」（末）が出されて一首の短歌を「合作」するのが、「をとこ」の当初の意図であったのであろう。前句が「……ば」で切れる「言い余し」であるのもそれを思わせる。ところが、〈簾の奥の方で多くの女の声がしますので……〉との言い掛けに対して、「女ども」からは〈白露の置いている花は色々だと知って下さいよ〉という応答があり、「対話」が成り立ったのである。宮田は「合作の中から問答體の生れて來る契機を見せてくれる過渡的な事例」と説明している。ちなみに、『後撰和歌集』はこれを一首の短歌として記載するが、『俊頼髄脳』22番では前句を「……こゑすなり」と「言い切り」の形にして引いて男と女の「対話」にしている。

要するに、Cノ1は「対話」のつもりが「合作」（結局は実方一人で詠んでいるが）、Cノ2は「合作」のつもりが「対話」となったのである。

さて、続いて宮田はもう一例挙げるのだが、それは私のみるところでは、Cノ1に類似する例である。

●参考例　Cノ3　『伊勢物語』第六十九段[13]

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば（斎宮）
又あふ坂の関はこえなむ（狩使）

まず前句で〈徒歩で（川を）渡ったけれども濡れなかったほどの（浅い）縁であったので……〉と斎宮が心情を吐露している。「言い余し」であるが「対話」を求めたと覚しい。対して付句では〈（伊勢から動けないあなたと違い）私は次にまた逢坂の関はきっと越えようと思います〉と狩使が答えたと見做せる。こう捉えると「対話」になっていることになる。一方で結局は、〈（この度は）徒歩で（川を）渡ったけれども濡れなかったほどの（浅い）縁であったので、（次に）また逢坂の関はきっと越えようと思います〉と、狩使が自分の気持ちを詠んだ短歌を完成させたとも受け取れるのである。[14]宮田はこれを「對話性を内にもつた合作の例」としている。ところで、Cノ3を「合作」とみた場合、先の「合作」の参考例Aとは違って、狩使の立場から詠んだ歌として仕立てられている点は、注意しておきたい。

ここまで宮田論を参照しながら「合作」から「対話乃至問答」への過渡期の短連歌を見てきて注意されるのは、当該短連歌を解釈するに当たっては、「合作」から「対話乃至問答」への過渡期であったことを考慮に入れなければならないことに加えて、それは一首の短歌の「合作」になっているのか「対話乃至問答」になっているのかという択一の問題ではなく、中間的なものになっているかも知れないとの観点も含めての見極めが必要である、ということである。そう考えると、当該短連歌の場合、まずはAに見られるような詠者二人の共有の思いを詠む「合作」ではないのに気づくのであるが、さ

らに宮田論を参照しながら自分なりにも考えてみて重要だと思うのは、道綱母と時姫が同じ意識を持っていたとも限らないではないかということである。例えば、道綱母は「言い余し」ではあるが「対話乃至問答」を仕掛けたつもりでも、時姫は「合作」（というよりも、今も述べたことより、Cノ3のような、付句を付けた人の立場に立った一首の短歌の完成）のつもりであったかも知れないのである。

二、平安時代の短連歌史（2）―機智や謎掛け―

このあたりに突っ込んだ考察は後回しにして、続いて、特に道綱母の前句について考えるために必要な観点として、②に関連する問題を取り上げる。ここで参照したいのは能勢朝次論[15]で、連歌の起源には「機智問答的な興味」があることを強調しつつ平安時代の作品にも目を配っている。そこに「知的興味をもって、自己の言いかけに対して相手がどう出るか、どう答えて来るか、という点に、感興をもって言いかける形」として引用して考察されているものをDとし、ここでは取り敢えず『蜻蛉日記』の頃前後の作品を見ておく。

●参考例　Dノ1　『俊頼髄脳』367番

躬恒

おく山に船こぐ音のきこゆるは

貫之

なれるこのみやうみわたるらむ

●参考例　Dノ2　『檜垣嫗集』25番

すきものどもあつまりて、よみがたからむすゑつけさせむとて、かくいふ

わたつみのなかにぞたてるさをしかは

とて、これがすゑつけよといへば

秋のやまべぞそこに見ゆらむ

能勢はDノ1の貫之の句については「熟みと海との掛詞をもって、難問に答えた」（傍点は原文、傍線は引用者）と言っている。〈奥山×船漕ぐ音〉という不合理が謎として前句で示され、付句で〈木の実が熟み渡る〉と言って、前句の事態が起こる説明がなされているのである。一方のDノ2の例も、単に「機智問答的」と言うに止まらず、前句が謎掛けで付句が謎解きになっているとも見做せる。要するには、前句で〈わたつみの中×鹿〉というあり得ないことが現実として突き出されたのに対し、付句では鹿も含めて海に映った映像を現実と取りなして、前句では謎であった事態が起こった説明もしている。

ところで、能勢は③と④についても強調している。[17]③については、「言い余し」から「言い切り」になっていって「機智問答的」な句が増えるとする。さらに④とも関連して、下

句「言い切り」・上句「言い余し」の下句起こしから、両句とも「言い切り」の下句起こしになっていく流れも指摘している。この流れの中で、「機智問答的」であるに止まらず、明確に謎掛け謎解き型とみえるものも現れてくるようだ。[18] やはり、能勢論に引かれているものから、下句「言い切り」・上句「言い余し」の下句起こしの例を挙げておく。

●参考例　Dノ3　『実方集』66番

小一条どのの人人、なぞなぞがたりに

かたずまけずのはなのうへのつゆ

といひけるに

すまひぐさあはする人のなければや

●参考例　Dノ4　『康資王母集』83番

ひたき屋に雪のつもりたるを、宮の下野

いかでかつもる火たきやの雪

といへば

けむりたつふじのしらねもかかるにや

ちなみに、付句の答えの型としては、Dノ3はDノ1に近い。一方のDノ4は、前句で示されたものの類例を付句で提示する型になっている。これでは前句の謎を解いていることにはならないが、院政期頃以降には幾つか見られる答えの型である。

三、道綱母の前句

さて、以上のことを踏まえて道綱母の前句から分析していく。まずは今取り上げた能勢論を土台に②に関して考えたい。能勢はDの中に当該短連歌も含めており、次のように説明している。

「逢ふ日」（葵）かと聞いているが、逢おうともしないで、よそに「立ちている」（橘）のは、という言いかけに対して、君のつれない心は今日こそはっきりと見とどけた、というのである。（傍点は原文）

この説明によると、「機智問答的」ではあるが、必ずしも謎掛け謎解きとまではみていないようである。しかし、少なくとも前句に限れば、早くに川口久雄[19]が「一種の謎（ぞな）、難題を提出してその解決を求める言語遊戯である。」と指摘するように、謎掛けだとみるべきである。つまり、〈逢ふ日×余所に立ち〉の不合理を謎として提示し、その謎解きを求めたのである。[20] この見方は以後の諸注釈書で踏襲されていないようだ[21]が看過できない。同時に、謎掛けの句だとすると、道綱母の句はDノ1の躬恒の句に次ぐぐらいの早いものであり、躬恒の句共々「言い余し」である点にも注意しておかなければならない。

ではこの際道綱母が求めたのは、参考例に依ればDノ1

のような型の答えであろうか。それとも、もう少し時代が下ればDノ4のような型もあるので、早くもそんな型を求めたのであろうか。またあるいは、答えの型までは求めなかったとも考えられる。結論を言うと道綱母の句の場合、どうもDノ1型を求めて出されたらしいのである。

それはまず、「葵」と「逢ふ日」の掛詞が和歌の世界で常套的なものであることを考えると、常識に反する不合理への強い疑問を呈していると見做されるからである。この点に関して参考にしたいのが、世代は下るが和泉式部が付句を詠んだ短連歌である。

●参考例　E　『金葉和歌集』巻十・雑下・連歌・658番

和泉式部がかもにまゐりけるに、わらうづにあしをくはれてかみをまきたりけるをみて　神主忠頼

ちはやぶるかみをばあしにまく物か

これをぞしものやしろとはいふ　和泉式部

下賀茂神社に参詣した和泉式部の姿態を見て、神主忠頼が〈神×足〉の説明を求めた、と言うより、詰問調で咎めていると受け取れるところがここでは肝腎だ。対する和泉式部は〈神が足なのは下の社だからです。（咎められる筋合いはありません。）〉と説明しながら言い訳しているわけだ。神への畏敬の念と和歌の世界における常套的掛詞と、問題の質は全然違うが、共に軽視すべきでない事柄を軽んじる不合理への抗議の思いがあると捉えれば、道綱母の句は神主忠頼の句の類例と目される。

さらには、道綱母の句が「……聞けど……」となっているところにも注意される。〈……と聞いておりますけど、どういうわけで……〉という意味合いが読み取れるではないか。神主忠頼の句と比較すれば、「……か」となっているところを和らげつつ皮肉を込めていると言えよう。

ということで、道綱母は謎を皮肉な口調で示して、その謎解きと同時に言い訳を求めたと考えられる。では、①に関連して、「合作」か「対話乃至問答」かいずれを求めたかと言うと、「対話乃至問答」、そのうちでも謎掛けであるから「問答」を求めたとみるのが自然だ。Dの中では、Dノ2は「合作」であったが、[22] Dノ1は前句が「言い余し」の「問答」であった。[23] また、Eは前句が「言い切り」の「問答」であるが、右に指摘した類似性からして参考にしてよいと思う。道綱母も「問答」で答えを求めたとみて間違いなかろう。先に、道綱母の句は前句「言い余し」でありながら謎掛け短連歌を仕掛けたという点においてDノ1の躬恒の句に次ぐぐらいの先駆的なものであったと指摘したが、「問答」を求めた点も併せて注意しておかなければならない。

ここで道綱母の句を説明的に諄いところまで訳すと、次の

ようになろう。

「葵」と言えば「逢ふ日」に決まっていると聞いておりますのに、（私に逢う気もなさそうに）あなたが余所に車を立てているというのは（いったいどういうことなのか、説明してもらいたいものです）

なお、「橘」は訳出しにくいので訳に含めなかったが、いずれにせよ、道綱母の句の場合、「余所に立ちばなの」と「橘」のうちの「はな」が余分になってしまっているのは気に掛かる。後の短連歌の例には同様のものはない。この掛詞に関しては出来栄えが劣ると言わねばなるまい。

四、時姫の付句

対する時姫の付句[24]の分析に移る。時姫の句も、短連歌史の中に置くと深い分析ができると考えるのであるが、その前にとにかく時姫の付句を観察することから始めよう。

再び当該短連歌に対する前節で引いた能勢の説明を見てもらいたい。諸注釈書を見ても、時姫の付句に限らず前句も含めて、これとほとんど同様に訳されている。しかしこれでは前句と付句が繋がっていないではないか。だからであろう、付句を、「蜻蛉日記注解二十四[25]」は「とんでもありません。私の方こそ、あなたのそのお咎めで、あなたの薄情なお心が、今日はよくわかりました。」（技巧の説明略）と訳し、『蜻蛉日記全注釈上巻[26]』は「そしらぬお顔はあなたのほう、すげないお方ときょうはじめて知りました。」と訳す。前句と繋げるために傍線部（共に傍線は引用者）を加えたと思うのだが、傍線部はどこからくるのか。特に前者は分からない[27]のであるが、後者に関しては、『蜻蛉日記全注釈上巻』の語釈に書かれている批評を見よう。

この句を上の句に付けると、「よそにたちばなの」は作者のことと逆転する。修辞上はそつなく返事をしているが、作者のほうからあいさつし、それまで黙っていたのは時姫のほうだから、この下の句は、意味内容上、上乗のものとはいえないだろう（傍点は引用者）

「この句を上の句に付けると……逆転する」というのは、傍線部を補って繋げるからである。ところで、この批評を読んで、時姫は男女間の贈答歌の切り返しの手法に倣ったのではないかと思った。贈歌で抗議してきたことに対しては、牽強付会であろうが責任転嫁であろうが、とにかく切り返したり言い返したりする返し方である[28]。それに倣い、実際は自分が道綱母の前を挨拶もなしに素通りしたのであろうとも、それを逆にして言い返しているとみられる。

さらには、道綱母が前句で言ったことを「逆転」させて自分の主張の中に取り込んでいるとみると、傍線部は補いではなくなる。つまりは、「対話乃至問答」をなしているのではなく、前句と付句併せて自分の立場からの一首の短歌を創ったともみればよいのである。そうすると、前句の部分は「黄

実」に掛かる有心の序になる。そして「黄実」は「君」との掛詞となって下に続いていく。すぐ下には「かつら」が物名で詠み込まれている[29]わけだが、冒頭から見て「葵」「橘」「黄実」「かつら」が葵祭の「今日」揃うのである。

ここで一首の短歌として訳すと次のようになる。なお、今述べた「黄実」と「かつら」の技巧及び「橘」は訳出しにくいので外してある。

葵と言えば「逢ふ日」に決まっていると聞いておりますのに、（私に逢う気もなさそうに）あなたは余所に車を立てているということで、あなたの私に対する冷たさを今日こそは思い知りました。

さて、時姫の句の観察から始めたのだが、ここまでで既に短連歌史の中に置いて考察していることになる。その考察によると、時姫は「合作」にしたことになるわけだ。さらに短連歌史を考慮に入れながら時姫の句の考察を続けよう。そこでまた宮田論を見る。①の中でも過渡期を問題にする宮田論において、「對話性を内にもつた合作の例」として[Cノ3]が挙げられているのを先に確認した。これを私なりに捉えると、斎宮が「対話乃至問答」のつもりで前句を投げ掛けたが（「言い余し」ではあるが）、結局は狩使の立場からする一首の短歌が成り立ったとみた。当該短連歌の場合もこれとよく似ている[30]。ただし、[Dノ3]では狩使の立場と言っても、二人の共有する情緒を踏まえての一首になっているのに対し、時姫の場合は、あくまでも自分の立場から切り返す形になっているという大きな違いがある。その点では「合作」と言うには相応しくないかも知れない。

次に②に関連して、時姫の付句では道綱母が前句で投げ掛けた謎が解けていないことを問題にしたい。先に道綱母はどんな型の謎解きを求めたのか考えたが、どちらの型にもなっていないのである。〈逢ふ日×余所に立ち〉を解くのではなく、それはそのまま〈だからあなたは冷たい〉と言っているだけである。この点に関しては、能勢論で挙例されていながら、先には挙げなかった次の例を参考にしたい。

●参考例　[Dノ5]『実方集』68番

八月ばかり、月あかき夜、花山院ひが歌よまむとおほせられて

秋のよにやまほととぎすなかませば
とおほせらるるに
かきねの月やはなと見えまし

前句で〈秋の夜×郭公〉という不合理が謎として出されたとも見做せるのだが、付句では謎解きや説明にかかるのではなく、〈垣根の月→垣根の卯の花〉という前句に似合った見立てを付け加えている。謎はそのままにして前句と付句で全体的に辻褄を合わせているのである。時姫の付句も同様で、

前句の状況に似合った訴えを付け加えているに過ぎない。ただ、Dノ5の場合は、詞書に書かれる事情や前句と付句で反実仮想を成している全体的構造からして、「合作」意識があるのは明白である。反対に謎掛け謎解き意識は希薄と思われ、むしろ全体として一首の「ひが歌」になっていればよいのであろう。時姫は、前句で謎を提示する「問答」を仕掛けられながら、Dノ5の実方のように応えてしまったのである。

とはいうものの、時姫の付句には先にも触れた機智的な技巧は施されてあった。宮田は連歌に限らず、「対話乃至問答」の中に「機知的傾向」があることを説いている。[31] 逆に言えば、短連歌の「合作」においては、必ずしも機智的技巧は求められず、それよりも「二人の作者の心が一つの詩想に統一されること」（第一節参照）が求められるのだ。そういうことからすると、「問答」として前句の謎解きにはなっておらずに、どちらかと言うと「合作」であるのに、詩想の統一より前句の機智的技巧の踏襲にかかっている時姫の句は、混乱しているとも言わなくてはならない。Cノ3との比較をここでもすれば（注30も参照）、Cノ3では、前句で〈徒歩人が渡る×濡れぬ江〉という不整合が出されて「対話乃至問答」が求められたらしくもあるが、狩使の立場に立ちながらも「二人の作者の心が一つの詩想に統一され」た一首の短歌となっていく付句には、機智的技巧は全くなかったのである。

五、道綱母と時姫の意識の懸隔
―「連歌の場」の問題とも関連して―

当該短連歌を短連歌史の中に置いて見た結果、重要な解釈については、特に時姫の意識に沿った解釈を示して、従来の解釈に大きな変更を迫る結果となった。加えて、①と②に関しては過渡期にあったというところに③と④も絡めると、道綱母と時姫の意識に懸隔があったらしいことも重要な問題として浮かび上がってきた。要するに、形は上句起こしの「言い余し」という「合作」を求めているように思わせる古い形に沿いながら、内容としては謎を投げ掛けて「問答」で説明を求めるという道綱母の斬新な意識を、時姫は十分に汲み取れなかったか汲み取っても応えられなかったのだ。いずれにせよ時姫の意識には「合作」があったらしいが、内容としては二人の統一された「詩想」を表すような「合作」にはならなかった。謎解きに関しても、時姫は道綱母の句が謎掛けになっていると気づかなかったのか、あるいはこれも気づいても解き得なかったのか。機智的な技巧を凝らす方だけに意識がいってしまったようである。

このように論じると、時姫の能力が劣っているととられるかも知れないが、時姫が劣るというよりも、「問答」で謎解きを求める道綱母の意識が短連歌史上のこの時期にあっては前を行きすぎているのである。またあるいは、俊頼乃至は『金

葉和歌集』の頃までの短連歌史は「混沌」の中にあり、そのせいであったとも言えるかも知れない。ここでも宮田の分析結果に耳を傾けたい。[32]

（前略）一般には合作意識が低流をなして對話的乃至問答的作風が次第に多くなりつつあつたと見られる。對話的乃至問答的構造をもつ連歌は短歌合作を中心に起つたこのやうな混沌の中から生れた。そしてこの混沌の中に一つの決定的な指標となつたのが金葉集巻十の「連歌」であつた。金葉集を轉機として新しく對話的乃至問答的構造をもつ文藝として連歌は新生する。

「混沌」の中で道綱母が「問答」型の謎掛けを前句にしたのは、いかんせん早すぎたのである。時姫には「合作」意識があって一首の短歌の完成で応えたのも当然であった。しかし、Aノ1のような「合作」でもCノ3のような「合作」でもなく、自分の立場から切り返すような短歌に時姫が仕立てたは、やはり「混沌」の中にあったからか。[33]

右の問題と関係させて、「連歌の場」ということを観点に加えておきたい。冒頭で引いた島津の言葉に依れば、「詠まれる場の上からも異なった姿を見せている」と言うのをここで思い起こしたいのである。それで、今までの①～④の短連歌史に関する纏めは、短連歌の内容と形式に着眼しての纏めであったが、ここに木藤[34]が分析する「連歌の場」に関する流れを付け加えたい。

⑤　短連歌の場は、大別して「偶発的な場」と「用意された場」に分けられ、六歌仙時代から「偶発的な場」で詠まれることが多かったが、十一世紀に入ると「用意された場」で詠まれることが多くなる。

木藤の言う「偶発的な場」とは、「突然、前句が提示され、その場ですぐ付句が付けられるのが普通」の場合である。[35]「用意された場」の方は、「酒宴の席」「和歌会のあと」「聯句と並行」「種々の遊びの席」に細分されていることから、どのような場を指すのか分かるであろう。さらに、この「用意された場」で「難題を出して、それに大勢で付ける」形が行われていたとも指摘している。そして参考例Dとした諸例にも言及しているのであるが、要するには、前句で謎が出される例は古い時代には少なく、その場合にはこれも例が少ない「用意された場」乃至はそれに準ずる場で出されるのがほとんどなのである。「用意された場」には、和歌に堪能な人が集っていることが多いと思うが、そんな人たちの間では、古い時代であっても謎掛け謎解き型の短連歌もあり得たのであろう。

話を当該短連歌に戻すと、これは言うまでもなく「偶発的な場」である。短連歌史のこんな時期にこんな場で謎掛けの前句を和歌の専門家でもない時姫に出すのは、ある意味常識外れであると言えよう。それにしても、和歌に対して人一倍敏感であった道綱母は短連歌に対しても時代の先端を行っていたのだとみておきたい。しかしながら、さすがに、先に述

べた通り、「立ちばな」の掛詞には少し無理があった。それはともかく、道綱母の前句の意識に時姫が付いて行けないのは当たり前だ。付句が「やゝ久しうありて」返ってきたのは当然なのである。また、この場面全体を読むと、時姫の句に対して批判的な侍女も、代案みたいなのを出す兼家も付いて行けていないと思うのである。ではそんな状況を道綱母はどう捉えてどう描写しているのか。「やゝ久しうありて」とわざわざ書くところなどは従来も問題にされているが、他にも問題はまだまだ残されていると言うか、拡がっていく。稿を改める。

注

（1）『島津忠夫著作集第三巻』（二〇〇三年一一月・和泉書院＝元、『連歌史の研究』一九六九年三月・角川書店）「第二章　短連歌初期の諸相」。

（2）『蜻蛉日記』の引用は、角川文庫『蜻蛉日記』（柿本奨著、一九六七年一一月）による。底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本。以下、同じ。

（3）『蜻蛉日記』上巻三年目の五月と九月に、道綱母と時姫が和歌を贈答する場面がある。ここを取り上げて拙稿「道綱母と時姫の二組の贈答歌―『蜻蛉日記』上巻前半部における町の小路の女の存在と関わって―」（『古代中世文学論考第37集』二〇一八年一〇月・新典社）を成した。

（4）短連歌を載せる平安時代の作品を網羅的に列挙している伊地知鐵男「和歌・連歌・誹諧―宗祇・兼載の誹諧百韻その他を紹介して俳諧連歌抄の成立に及ぶ―」（『書陵部紀要』3・一九五三年三月）などを参照した。

（5）宮田正信『付合文藝史の研究』（一九九七年一〇月・和泉書院）にある言い方を元に、便宜「合作」・「対話乃至問答」と言って論じていく。後者については、同著の「一　付合文藝」「二　付合文藝の素地」「三　付合文藝の成立」において、「問答體」など色々な言い方がされているが、本稿では「対話乃至問答」という言い方を基本にすることにした。場合によっては「対話」あるいは「問答」と言うこともある。

（6）『俳文学大辞典』（一九九五年一〇月・角川書店）の「短連歌」の項（岸田依子）参照。

（7）木藤才蔵『連歌史論考上増補改訂版』（一九九三年五月・明治書院）「第一章　短連歌の形成と展開　二　平安朝中期の短連歌」と、宮田「三　付合文藝の成立」（注5参照）。

（8）和歌集及び歌論書の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』による。以下、同じ。

（9）宮田「短歌の合作から問答體連歌へ」（注5「三　付合文藝の成立」の中の一節）。

（10）木藤「第一章　短連歌の形成と展開　四　連歌の場」（注7参照）。なお、木藤の問題にする「連歌の場」については、第五節で問題にする。

（11）引用は、日本文学Ｗｅｂ図書館『私家集大成』による。

（12）注9に同じ。

（13）『伊勢物語』の引用も、便宜、『新編国歌大観』によった。

（14）木藤「二　平安朝中期の短連歌　1　六歌仙時代」（注7参照）も、「独立した二句による問答というよりは、一首の和歌を二人

で合作したという趣のものである」という言い方で説明している。

(15) 『能勢朝次著作集第七巻連歌研究』（一九八二年七月・思文閣出版）「Ⅰ　聯句と連歌」（＝元、『聯句と連歌』一九五〇年二月・要書房）「第三章　短連歌の性格とその発展　一　機智問答的性格　二　下句起しの形式の発生　三　各句の独立性の唱道　四　対句的表現の短連歌」。特に、「一　機智問答的性格」。能勢論の引用はすべて「一」より。

(16) Dノ2は『大和物語』第百二十八段にも載る。西丸妙子『檜垣嫗集全釈』（一九九〇年五月・風間書房）や『大和物語』の諸注釈書も参照したところ、同短連歌の解釈については、細かいところにおいては議論が分かれている。

(17) 能勢「第三章　短連歌の性格とその発展　二　下句起しの形式の発生　三　各句の独立性の唱道」（注15参照）。

(18) 再び注6の『俳文学大辞典』参照。

(19) 日本古典文学大系『土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』（一九五七年一二月・岩波書店）。

(20) 一口に「謎掛け謎解き」と言っても、木藤の言葉を借りれば（注10に同じ）、「前句に提示された不合理を、付句で納得させるように機知をめぐらす」場合と、「難題を提出されて、それを付句で解決する」場合があり、さらにそのどちらとも言えそうなものもあるようだ。当該短連歌は、「不合理」とそれに対する「納得」ということであろうが、他の例も含めて、本稿では便宜概ね「謎掛け謎解き」と言って論を進めている。

(21) 島津（注1に同じ）は川口説を踏襲している。田村悦子「蜻蛉日記絵の詞書断簡について」（『美術研究』241・一九六六年三月）も「一種の謎、難問をしつらえて言いやった」とする。

(22) 宮田（注9に同じ）に指摘がある。

(23) 宮田「金葉集時代の連歌」（注5「三　付合文藝の成立」の中の一節）に指摘がある。能勢（注15）の「一　機智問答的性格」では「合作」とみている。

(24) 時姫の付句は、侍女の代作であったり、侍女達と協同で創られたりした可能性もあるが、論述が煩雑になるので、時姫が創ったものとして論じていく。

(25) 秋山虔・上村悦子・木村正中、『国文学解釈と鑑賞』29巻4号・一九六四年四月・至文堂。田村（注21に同じ）も、これと同様の訳を示している。

(26) 柿本奨、一九六六年八月・角川書店。

(27) 犬養廉　新潮日本古典集成『蜻蛉日記』（一九八二年一〇月・新潮社）も、時姫の句の訳の冒頭に「よそに立っておいでなのは、あなたのほう。」を付けている。前句と付句を繋ぐ言葉としてはこちらの方が分かり易い。が、いずれにせよ、この一文はどこからくるのか分からない。川村裕子　角川ソフィア文庫『新版蜻蛉日記Ⅰ（上巻・中巻）』（二〇〇三年一〇月・角川書店）も同様。

(28) これとよく似た切り返しを兼家が上巻前半部の町の小路の女の出産の記事の直前の記事で行っている。兼家が道綱母邸に忘れた「書（ふみ）」を取りに使を道綱母邸にやり、道綱母と兼家が歌を遣り取りする場面である。

ふみおきしうらも心もあれたれば跡をとゞめぬ千鳥なりけり

（道綱母）

心あるとふみかへすとも浜千鳥うらにのみこそ跡はとどめめ

（兼家）

兼家の歌は、自分から「書（ふみ）」を返せと言っておきながら、道綱母

の方が「心離（あ）れて「書（ふみ）（を）返」してきたとして詠んでいる。詳細は、拙稿「『蜻蛉日記』上巻の離婚状態を脱した時の贈答歌―浜千鳥の贈答歌をめぐる考察―」（『言語文化研究徳島大学総合科学部』23・二〇一五年一二月）参照。

(29) 「君」と「黄実」の掛詞と「かつら」の物名は多くの注釈書で指摘されている。ただ、新日本古典文学大系『土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』（「蜻蛉日記」は今西祐一郎校注、一九八九年一一月・岩波書店）は、「諸注「きみ」に「君」と「黄実」（橘の実をいう）をかけると解するが、他に例を見ない。」と言う。短連歌における技巧は正統な和歌で使われるもの以外のものも多くあり、他に類例がないことは問題にはなるまい。

(30) 連歌の源流を考える際には必ず問題にされる『万葉集』巻八の尼と大伴家持の唱和も、尼は「合作」にすることを求めたのに、家持は「対話」にしたとの解釈もある。島津注1著「第一章　連歌源流の考」など。当該短連歌は、これと逆のことになったのである。また木藤（注14に同じ）は、尼と家持の唱和とCノ3を「上句の女性の発想は和歌的であり、それを継いだ男の発想は連歌的であった」と結論する。尼と家持の唱和はともかくとして、Cノ3については異論がある。まず斎宮の前句であるが、これは「対話乃至問答」を求める短連歌的句とみられる。さらには、〈徒歩人が渡る×濡れぬ江〉という不整合が出されているようにも感じる。もっとも、ここで不整合や謎を出してその説明などを求めているのだとしたら、話の雰囲気と合わないのであるが、とにかく不整合が出されているのなら短連歌的である。一方、結局一首の短歌を仕立てる結果になっているところを捉えれば付句は和歌的である。当該短連歌も、前句で謎を出して「問答」でその謎解きを求めるのは短連歌的であり、付句では技巧を凝らしながら結局男女間の贈答歌に倣った返歌のような一首の短歌にしているのは和歌的である。

(31) 注5の「二　付合文藝の素地」及び「三　付合文藝の成立」。

(32) 「付合文藝の成立」（注5「三　付合文藝の成立」の中の一節）。

(33) 注30で指摘した点も、「混沌」を鍵にして考えれば説明がつくかも知れない。ところで、新日本古典文学大系（注29参照）と新編日本古典文学全集『土佐日記蜻蛉日記』（「蜻蛉日記」は木村正中・伊牟田経久校注・訳、一九九五年一〇月・小学館）は、「かつら」の物名に関し、『古今和歌集』巻十・物名・433番歌を引用している。434番とともに引いておく。

あふひ、かつら　（よみ人しらず）

かくばかりあふひのまれになる人をいかがつらしとおもはざるべき

人めゆゑのちにあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ

時姫の念頭にはこの二首があったとみてよいのではないか。すると、時姫の意識としたら、短連歌を仕上げるというより、物名歌乃至は誹諧歌的技巧を凝らしながら一首の短歌を仕上げるつもりであったと言う方が中っているかも知れない。「黄実」と「君」の掛詞もそれに合致する（注29参照）。この時姫の付け方を短連歌というところから観ると、混乱が感じられるのは当然ということになる。ちなみに、右の『古今和歌集』歌であるが、『古今集校本新装ワイド版』（西下経一・滝沢貞夫、二〇〇七年一一月・笠間書院）に依ると、基俊本では434番詞書部分に「かへし」とある。なお、藤岡忠美は「女と女の贈答歌―蜻蛉日記の道綱母と時

姫―」（『平安朝和歌読解と試論』二〇〇三年六月・風間書房）で当該短連歌を取り上げ、道綱母が古今433番歌を本歌として前句を詠み、時姫もそれを心得て付句を付けたとみる。藤岡の指摘は前句を謎掛けだとは見做さないでなされていると覚しいが、この指摘と本稿の主旨とを併せて前句を捉えると、特定の和歌を踏まえながら謎を掛けるのは、凝りすぎているように思う。古今歌（あるいは、434番歌も含めて）を意識したのは、時姫のみであったとみておきたい。いずれにせよ藤岡は、前句について「恋歌まがいの歌であることは、「逢ふ日」を詠み入れていることからもわかる」というなど、示唆に富んだ指摘を多く含みつつ、この場面を全体的に捉えて論じている。藤岡論も十分に踏まえながら、この場面を全体的に捉えた別稿をいずれ近いうちに成すつもりである。

(34) 注10に同じ。

(35) C/3の『伊勢物語』第六十九段の短連歌を何度か参考にしたが、論述を複雑にしないためもあって、これを他の「偶発的な場」で詠まれた例と同列に扱ってきた。もとより、C/3は虚構の物語の中にあることに注意しなければならない。ただ、創り物語などと違って、歌物語であるから、現実と同じあるいはほとんど同様に受け取られていたとみてよいのではないか。また、創られた時期については、木藤（注14に同じ）が片桐洋一の『伊勢物語』研究を参照しながら注意を払っている。結果「十世紀の中頃には一般に流布していたとみることができる」とし、同時に「九世紀の後半には成立していた」可能性も示す。

（つつみ・かずひろ　徳島大学大学院教授）